平成２１年度　第３回企画展

収蔵品で語る宮代の農耕
～こめづくりの農具～

開催期間

平成２２年１月９日(土)～４月１８日(日)

期間中の休館日
1/12.18.25
2/1.8.15.22
3/1.8.15.23.29
4/5.12
その他、臨時休館日

宮代町郷土資料館
埼玉県南埼玉郡宮代町字西原 289
TEL0480-34-8882
FAX0480-32-5601

開催にあたって

宮代町は、低地と台地の入り組んだ地形をしており、こうした地形を巧みに利用し古くから米づくりが盛んに行われて来ました。歴史的に見ても、少なくとも古墳時代以来行われて来たことが知られています。

米づくりの作業は、人力や馬や牛を使った田起こしから始まり、苗代作り、田植え、除草、水の管理、収穫など様々な道具を用いながら、人の手作業によるいくつもの工程を経て行われていました。

こうした手作業による米づくりも、昭和30年代から40年代にかけて次第に機械化され、田起こしはトラクター、田植えは田植え機、稲刈りはコンバイン等と、人力から機械に取って代わりました。この結果、農作業の省力化や効率化を生み、米づくりの日程も1ヶ月以上早まり、農家の生活も大きく変りました。

今回の展示は、機械化される以前の米づくりの道具を展示しました。機械化以前の米づくりには、弥生時代以来の伝統的な「原風景」が残されていたものと考えられます。展示させていただいた道具の数々を通じて、こうした「原風景」の一端をご覧いただき、これからの暮らしの参考になれば幸いです。

おわりに、本展の開催にあたり、貴重な資料のご提供、ご出品並びにご指導、ご協力いただきました関係各位に心よりお礼申し上げます。

平成22年1月
宮代町郷土資料館

凡例

1. 本書は、平成22年1月9日から平成22年4月18日まで開催される、宮代町郷土資料館企画展「収蔵品で語る宮代の農耕　～こめづくりの農具～」の展示図録です。
2. 展示の企画及び図録の執筆、編集、写真の撮影・複写は、当館学芸員青木秀雄が担当しました。
3. 田起こしから収穫までの月日は、町史編さん等で実施した聞き取り調査によるもので、道具の名称は寄贈いただいた時の調査等に基づいたものです。したがって、それぞれ各家によって異なる場合があります。
4. 展示資料の寄贈者については、寄贈された当時の氏名を掲載しました。
5. 本展の開催、図録の作成にあたり、下記の皆様、関係機関を始め多くの方に多大なご協力をいただきました。

出品者、協力者一覧（敬称略・順不同）

埼玉県立歴史と民俗の博物館　青木千代子、伊草侃斗、伊草英雄、岩崎克己、大高彰、折原高、加藤あさえ、金子和生、小島雅郎、小島隆男、小林隆、竹内久喜、富田利幸、中村巳代治、福田政義、松井俊雄、横溝東、吉岡郁子、吉岡繁雄、渡辺克之、渡辺栄

田起こし・田植え

米づくりは、田起こしから始まりクロツケ、代掻き、そして苗間をつくり苗を育て、代掻きの終わった田に苗を植えることから始まります。その工程ごとに見てみましょう。

田起こし

米づくりの作業は、「田起こし」の作業から始まります。「田うない」、「田うね」などと称され、「マンノウ」を使った人力による作業や、牛や馬を使って「バコウ」と呼ばれるスキを馬や牛に取り付けて行われました。「バコウ」を後ろで操る人を「シンドリ」といい大人の男性の仕事で、馬を誘導する人を「ハナドリ」といい、子どもや女性の仕事でした。機械化されて、昭和 30 年代半ばから動力の耕運機である「マメトラ」に変りました。田起こしは、3 月頃行われました。

主な道具　バコウ、その他

バコウ

マメトラ（耕運機）

クロツケ・代掻き

田と田の境に土を盛り上げたのを「クロ」（畦）と呼び、代掻きの前に土を盛り上げる作業である「クロツケ」を行います。道具は「シャクシ」を用いました。手でつける場合もあり「テグロ」と呼ばれました。「クロ」は、保水のための重要なものです。4 月末から 5 月に行われました。

代掻きは、田に水を入れて「マンガ」（馬鍬）をつけた牛馬に引かせて行われました。田起こしと同じように「シンドリ」と「ハナドリ」の 2 人で行いました。代掻きは 3 回ほど行いました。柔らかい田では手作業で代掻きを行いました。代掻き後、「ナラシボウ」で田全体を平らにしました。この作業は、水が田にまんべんなく行くようにするためのものです。6 月田植えの前に行われました。

主な道具　シャクシ、ドロアゲ、マンガ、ナラシボウ、その他

マンガ

ドロアゲ

苗代・苗間

田の一部、あるいは全部を「苗間」、「ネイマ」として苗代を作り、苗を育てて大きくしてから田に移植しました。苗間をする田は用水の水の入りやすい所を選び、スイコ等で水を田に入れました。苗間は「籾振り」という稲の種をまく作業を行い、約50日ほどたつと稲の苗も田植えにちょうどよく生育したそうです。

主な道具　スイコ、タナラシ(苗代ナラシ)

陸田での苗間の種まき風景

苗取りと田植え

田植えの前に、「ナエマ」で、苗取り作業を行いました。田植えの当時朝早くから起きて行われるもので、苗取りの人と田植えの人に分かれて仕事をしました。苗取りは「ナエトリコシカケ」に腰掛けるなどして行われました。

田植えは1人で1日に約3畝（約3ａ）位を植える事が出来たといわれています。畝の間は1尺（約30cm)、株の間は6、7寸（約18～21cm）とりました。畝をきめる基準のために、「ハリナワ」を張りました。「ハリナワ」を巻きつける棒などで間隔を測ったりしました。なお、田植えは、6月20日ごろ行われ、7月1日の浅間様の前までに行われました。また、苗取りや田植えは「イイユイ」といって家同士でお互い手伝を頼んだりしました。

主な道具　ナエトリコシカケ、ナエトリカゴ、ハリナワ
その他

ナエトリコシカケ

ナエトリカゴ

町内の田植えの風景
（『公民館』第3号より）
昭和35年

田の管理

稲を植えてから、刈り取るまで除草や水の管理、施肥などを行いました。夏の作業なので大変だったようです。

タコスリ

稲を植えた後の田には草が生えてくるので、除草作業を行います。この除草作業を「タコスリ」といいます。2、3 回行い、それぞれ 1 番ずり、2 番ずり、3 番ずりなどといいました。「タコスリ」などと呼ばれる道具を使い、苗間を擦るようにして除草を行いました。その後、「タコロガシ」などといわれる除草機が出てきたのでこれを使用するようになりました。

「タコスリ」は、田植えをしてから 10 日位した 7 月上旬に、最初のタコスリ・一番ずりを行いました。この直後には素手で除草する「カッパナシ」を行いました。その後、10 日くらいで 2 番ずりを行い、直後に 2 番草といって草取りを行いました。7 月下旬に 3 回目の除草を行いますが、2 番ずりを良く行っておくと 3 番ずりまでは行わなかったそうです。こうした、除草作業は炎天下で行われましたので、重労働だったようです。

主な道具　タコスリ、タコロガシ、その他

タコロガシ

水の管理

田植えの後、田に水が不足すると草も生え、稲の生育にも影響が出るので、「ミズグルマ」を使って田に水を入れました。

また、小さな用水から直接水が入るところもあり、いずれも毎日田を見回って水の調整をします。7 月下旬から 8 月上旬には、「土用干し」といって田の水を落としました。

用水路にかかる田は比較的水の心配はありませんでしたが、「天水場」といって雨水に依存する田を持つ地域では、雨の少ない年には「雨乞い」を行ったそうです。

主な道具　　ミズグルマ、その他

ミズグルマ

収穫・脱穀・調整

10 月中旬、秋の実りの時期、稲刈りが始まります。稲刈りは手作業で行われ、刈った稲を束にして、竹で組んで作った「ハンデン」で干し、その後、稲の束を家に持ち帰って脱穀、調整しました。

稲刈り

秋、10 月 10 日頃から 11 月中旬頃に行われます。早稲は、9 月初めに穂が出て 40 日ほどして稲刈りとなります。10 月 19 日に行われる「オヒマチ」という行事が稲刈りの目やすともいわれています。

稲刈りは、素足で田に入り、鎌を使って一株ずつ刈り取りました。一般的に 5 株を一束にして、これを×状に置いてゆき、作業が一段落すると、これを縛って「ハンデン」に掛けます。

主に、束を縛る作業は女性が行い、稲束を掛ける「ハンデン」は男性が作り、それに掛けました。「ハンデン」に掛けた稲束が乾くと、家で脱穀・調整を行うため、「ハンデン」から稲束をおろし、おおよそ 16 束で 1 輪の大束にして両先の尖った「カツギボウ」の片側に 2 輪づつさし、肩に掛けて荷車や集積場所まで運びました。これを大八車や牛車等の荷車で家まで運びました。

なお、地盤の悪い田では稲刈りに「タブネ」を用いて、刈り取った稲を運びました。

主な道具　カマ　カツギボウ　タブネ、その他

ハンデンに稲を掛け干している風景

ハンデンの組まれた状況

タブネ

脱穀・調整

家に運ばれた稲束は、「ガーコン」と呼ばれる回転式の脱穀機で脱穀を行いました。それ以前は、「センバコキ」と呼ばれる鉄片を 30 本位植え込んだ道具で稲の穂をしごいて籾を落としていました。

一般的に、脱穀された稲はフルイにかけ、「トウミ」であおった後、庭に「ムシロ」を敷きその上に籾を置き、天日で干します。おおむね、「ムシロ」3 枚に２斗ザル 1 杯程度の籾を干したそうです。

乾燥した籾は「トウミ」であおり、「カラスヒキ」と呼ばれる「カラウス」で挽くのが一般的でした。トオシとよばれる「マンゴクトオシ」を使って玄米になったものを選別して俵に詰めました。

なお、「トウミ」や「トオシ」ではじかれた籾のついているものは再度「カラウス」に 3 回ほどかけられました。

こうして、収穫された米は玄米で保存し、稲藁を用いて「タワラアミキ」で編んだ米俵に入れて出荷しました。食べるときには、精米機で精白しました。なお、１俵は６０キロで、昭和 20 年代以前は「サオバカリ」で、以降は「ダイバカリ」で重さを量りました。

主な道具　マンゴクトオシ　トウミ　ザル、サオバカリ、ダイバカリ、マス、その他

ガーコン

マンゴクトオシ

トウミ

ザル

トウミでの作業風景　昭和 40 年代

引用参考文献

大館勝治・宮本八惠子　2004　『いまに伝える農家のモノ・人の生活館』　柏書房
埼玉県立さきたま資料館　1985　『北武蔵の民具』
所沢市史編さん室　2002　『所沢の民具　1』
所沢市史編さん室　2004　『所沢の民具　2』
宮代町教育委員会　2003　『宮代町史　民俗編』